
シークレット・ラブ

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレット・ラブ

【Nコード】

N6859Y

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

米花中学校に通う、栗山舞優は小6の時、

ある事がきっかけで密かに新一に思いを寄せる。

しかし、舞優の親友、倉科由美子もバス停で見かけた新一に、

思いを寄せていた。

自分の恋心をしまいこんで、親友の恋を応援することに。

時が流れて、高校入学。

新一と同じ高校だったことに喜ぶ舞優と由美子だったが、想像していなかった出来事が待ち構えていた。

Secret 1

誰にも言えない秘密の恋。

長年、自分の心の中にずっと閉じ込めていた。

小6の夏・・・・・・・・ある事がきっかけで芽生えた恋心・・・・。

私の好きな人は

帝丹中学に通う

『工藤新一』君。

名前しか知らない。

私は栗山舞優。
くりやま まゆ

米花中学3年生。

受験の真っ只中。

「聞いて、舞優！

昨日のサッカーの試合に工藤君が居たの！」

「え？」

「サッカー部だったんだ、知らなかったあ。」

この子は私の親友、倉科由美子。

彼女も私と同じ・・・

工藤君が好きだった。

Secret 1（後書き）

短いですが、記念すべき第一話！です。
新連載いたしました・・・

最初のほうは、新一を見かけたり・・・
するような話しが中心なので
あまり新一と蘭が出てきたりしません。
中盤あたり・・・

高校入学してから、波乱万丈な毎日を繰り広げる予定です！

末永く、宜しくお願いします♪

私は比較的、大人しいほうだ。

肩に付かないほどの長さの黒髪。

特別手入れをしてないせいか、固い。

その点、由美子は可愛い天然パーマ。

鎖骨まである髪をゆるく2つ結びにしている。

どうして、ここまで違うんだろう。

「聞いて！舞優！」

「今度はどうしたの？」

「バス停でね、また見かけたの！工藤君を。」

「へえ。」

由美子が工藤君を見たのは約一ヶ月前。

バスの中で出会ったらしい。

一目ぼれってやつ・・・。

隣に居た友達らしき人が「工藤！」って呼んでいた事で

名前が『工藤』ってことがわかったとのこと。

由美子の思い人が私と同じ人だなんて

しばらくしらなかった。

「工藤・・・なんていうんだろう。」

下の名前が気になるよね。

サッカー部の試合の応援してたとき、
相手中学に工藤君が居たからサッカー部だってことは確か・・・
そして、帝丹中だってことも！」

「うんうん。」

「どこの高校に行くんだろう。
頭が良かったら、東都高校だよねえ。」

「帝丹中なら・・・帝丹高校っていう場合もあるよ?」

「ええ!? 帝丹高校？」

私、絶対無理! いけないよお。」

「そんなことないよ、頑張れば大丈夫だって。」

「舞優は頭良いから・・・。

はーあ、人生って上手くいかないもんねえ。」

「由美子・・・」

私はそれ以上、由美子に言葉をかけられなかった。

ドキンッ

由美子が見かけた、というバス停に
興味本位で行ってみた。

「工藤……くん。」

彼が居た。

3年前よりもはるかに大きくなっている。

当たり前か……。

でも、すごく……大人っぽくなってる。

胸の高鳴りがやまない。

バスに乗り込む。

通路を挟んで工藤君は座っていた。

ちらつと盗み見てみる。

疲れたのか、うとうとと工藤君は目を開けたり閉めたり……。

「クスッ可愛いな……」

由美子の思い人だと知ったときから

しまいこんでいた恋心が今、もう一度よみがえってくる。

ドキンッ

ドキンッ

ドキンッ

苦しいくらいに胸が高鳴る。

ねえ、工藤君・・・

貴方はあの日のことを・・・

私のことを、覚えていますか？

S e c r e t 2 (後書き)

思わぬ再会!!

ですね。

S e c r e t 3

私たちの出会いは小学校6年生の夏頃。

修学旅行のとき。

同じ宿泊先だったのを覚えている。

「あー、気持ちよかったね。」

「うんうん！」

「温泉って広いから好きっ」

「でたよー亜澄の広いもの好き！」

「いいじゃない！」

なんてバカ騒ぎをやっていた。

修学旅行一日目が間もなく終了する。

ドキンッ

一目、見た瞬間に胸が高鳴ったことを今でも覚えている。

「なあ、工藤。おごつてくれ！」

「やだね。」

生徒同士の金の貸し借りは駄目だって
さっき言ってただろ？」

「んだよ、イキナリ真面目になりやがって。」

「不真面目よりはいいだろ。」

「安達、諦めろ。」

「工藤はこういう奴だ。」

「へいへーい。」

「舞優？」

「あ、ごめん、今行く！！」

しばらく、胸の鼓動が止まらなかった。

「えー、では・・・これから自由行動となります。
くれぐれも一般の方に迷惑がかからないよう、十分注意を払って
ください。」

「いいですか？」

「はい。」

「では、解散！」

先生の合図と共に口々に話し合う。

「ねえ、最初はココでしょ？」

「そうそう！」

「迷いやすいからちゃんと行動とらなきゃね！
とくに、由美子は。」

「え？？私い？」

「あんだ、すぐどこか行っちゃうんだもん。」

「えへへ。」

「まずは・・・このバス停へ行かなきゃね。」

地図を見て確認。

いよいよ、自由行動が始まる。

S e c r e t 3 (後書き)

まだ、過去編が続きます。

「あと15分で来るみたい。」

「そっかあ。」

「でも、よかったね。」

「このバス停、ベンチが着いてるから楽チン。」

「ほんとだねー。」

「あ、ねえ ちょっとトイレ行つて来るね。」

「わかった。」

「早めに帰つて来るんだよ?」

「うん。」

私は早々と済ませて、小走りでバス停へと向かった。

「おれは強い
力だけは・・・誰にも負けないいいい！」

私が橋を渡ろうとするとき、

向かいからまだ昼だというのに酔っ払ったおじさんがやってきた。

運が悪く、私とおじさん以外に人が居なかった。

出来るだけ近寄りたくなかった私は、できるだけ端っこを歩く。

「へろへろおん〜。」

よろめくおじさんの足。

「キヤッ」

ドンッと私にぶつかってきた。

その後は

もう、スローモーションとしか

言いようがない。

”落ちる・・・！”

心の中で叫んだ。

相変わらずおじさんは酔っ払ってて

私に気づきもしてなかった。

ガシッ

「おい、大丈夫か!？」

「・・・え？」

ふいに誰かに腕を掴まれた。

知らない、男の子。

「今、引くからじっとしてろよ。」

「う、うん。」

ストンッ

「あり……がとう。」

「よかった……」

向こうから落ちるのが見えて全力疾走。」

よっぽど遠くから走ってきたのか

男の子は汗だくだった。

「修学旅行？」

「うん。そっちも？」

「ああ。」

「あの・・・助けてくれて本当にありがとう。
もう、駄目だって思ったから・・・」

「そっか。」

すると、同じ班らしき女の子が叫ぶ声が聞こえてきた。

「新一く？」

「わりい、今行く!!」

「新一・・・？」

「ああ・・・俺、帝丹小学校の工藤新一！」

「えっと、私・・・米花小学校の栗山舞優。」

にかつと笑う工藤君の笑顔・・・

つられて私も微笑み返した。

工藤・・・新一君。

これが私と彼の出会いだった。

S e c r e t 4 (後書き)

つてことで・・・

一応過去編終了でございます

「舞優」

「どうしたの？」

「また、工藤君？」

「ウッフ・・・実は、そうなの！」

「・・・由美子、わかりやすいもんね。」

「悪かったわねえ。」

「だって、他中の人にこんなに夢中になったの初めてなんだもん！」

「よかったね。」

「うん！」

「・・・舞優は、好きになった人とか居ないの？」

「え？」

「・・・私は・・・居ないよ。」

「ふーん。」

舞優、可愛いのに。」

「そんなこと、ないよ。」

親友に嘘ついちゃってるもん・・・

すんごく、醜いと思う。

「由美子だって、可愛いじゃない。」

「そうかなあ？」

でも、舞優のほうが可愛いと思う!」

「ありがとう。」

「舞優、ちゃんと勉強してるの？
受験生でしょ。」

受験生・・・か。

いやゝな響き。

「もう、何ヶ月もないんだからね。
大丈夫？」

「ん・・・」

「ちゃんと話さないといけないって思ってたけど・・・
あなた、帝丹高校に行くんでしょう？」

「うん・・・」

「米花女子じゃ駄目なの？」

「え？」

いまさら、何を言っただろう・・・

「あそこなら、寮もあるし・・・
看護科もあるしね。」

帝丹よりワンランク下だけど・・・
そんなに低い学校でもないでしょ？」

「そうだけど・・・」

「今の貴方のランクじゃ、帝丹は厳しいって言われたでしょ？
考えなおす気はないの？」

母親の言葉を聞いていると

『帝丹中なら・・・帝丹高校っていう場合もあるよ？』

自分の言葉がよみがえる。

「清純女子学園もいいわねえ・・・

帝都実業高校も・・・

杯戸高校でもいいわねえ。」

「・・・帝丹！」

「え？」

『帝丹中なら・・・帝丹高校っていう場合もあるよ？』

また、頭の中で流れる。

私が由美子に言った言葉・・・

「頑張れば、帝丹にいけるって先生も言ってたし・・・
やっぱり、帝丹にいく！」

「・・・そう。

だったら、がんばんなさいよ。」

「うん！」

かなり少ない確立だけど・・・

私は賭けてみたいと直感的に思った。

Secret 5 (後書き)

かなりお久しぶりな投稿となってしまいました・・・

ほんと、最近不定期で・・・

それでも頑張りたいと思ってますので、

皆様・・・見放さないください！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6859y/>

シークレット・ラブ

2011年12月3日14時55分発行